● 活動報告 【No. 272】 広報

NPO 法人 日本防災士会
北海道防災士会

北海道防災士会 「道南ブック報道」

1. 報道日時 令和５年３月 11 日(土) 13:30～15:00
2. 報道機関 北海道新聞、他地域誌等による。
3. 報道概要 北海道防災士会道南ブロック設立、活動等

あなたの

「心の備えから・・」

新聞 2023年(令和5年) 3月12日(日曜日) 10

災害に備え 地域で取り組み

防災力の向上目指す

北海道防災士会が道南ブロック設立

防災教育や被災地支援に取り組む認定NPO法人日本防災士機構（東京）の民間資格「防災士」の有資格者でつくる北海道防災士会（横内春一代表）の道南ブロック（伊藤友彦代表）が11日、結成された。函館市のサン・リフレ函館で設立総会が開かれ、設立趣意書、会則、事業計画などを採択し、渡島、檜山両地域を中心に全道で活動を展開する。

北海道防災士会は2013年に設立。これまで札幌市を中心に全道で活動を展開してきたが、より地域に根ざした活動に取り組むために道南はブロックを目指し、道南は初の地域組織となった。

設立総会には、同資格の防災士約90人が参加。横内代表も「地域防災への貢献に期待したい」とビデオメッセージを寄せた。

事業計画には、毎月の研修会の開催、はこだて防災マルシェ（函館市女性会議主催）など地域防災イベントへの協力を盛り込んだ。

伊藤代表は7月の北海道南西沖地震30周年に向け「被災経験を収集し、次の時代に伝承したい」としている。（神部 造）

地域防災の課題について話し合った設立総会

いざという時のために

イオン上磯店で体験イベント

【北斗】災害発生を想定した体験イベントが11日、イオン上磯店屋上で開かれた。来店者らが330人が救命体験などを通じて防災意識を高めた。

イオン北海道、北斗まちの会等、北斗防災サービス

心臓マッサージを体験する子ども

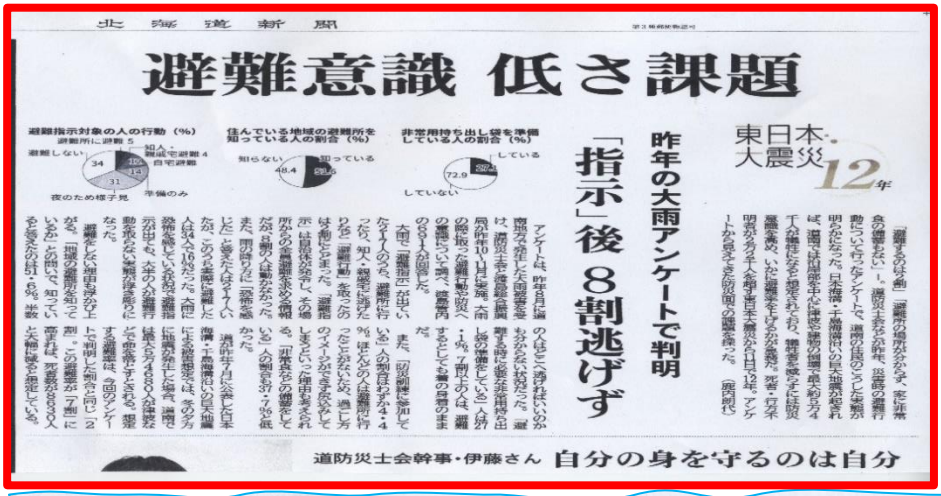
たち10事業者で構成する実行委の主催で、市も協力する。

会場には防寒具、災害用カードなどの防災グッズの使い方を体験できるブースが並び、看護師が心臓マッサージを指導した。消火器の使い方を体験した北斗浜分小5年生の八木虎昌君(11)は「いざという時に人助けできるようになりたい」と話していた。

次回イベントは9月1日に同8年の佐藤亮君(12)は「いざという時に人助けできるようになりたい」と声をそろえた。

聴覚障害者の筆談を補助する要約筆記サークル「あさがお」も参加。来場した北斗ろう協会の扇谷吉久会長は「聴覚障害者は災害情報から取り残されがちだが、手話がわからない人も筆談などの手段を使って情報を伝えてもらいたい」と話していた。

次回イベントは9月1日に合わせての「防災の日」に合わせて実施する予定で、実行委は「子どもたちの体験の機会にしたい」としている。（神部 造）



北海道新聞

避難意識 低さ課題

昨年の大雨アンケートで判明

「指示」後 8割逃げず

東日本大震災12年

避難指示対象の人の行動（%）

住んでいる地域の避難所を知っている人の割合（%）

非常用持ち出し袋を準備している人の割合（%）

道防災士会幹事・伊藤さん 自分の身を守るのは自分

いざという時のために

イオン上磯店で体験イベント

【北斗】災害発生を想定した体験イベントが11日、イオン上磯店屋上で開かれた。来店者らが330人が救命体験などを通じて防災意識を高めた。

イオン北海道、北斗まち

心臓マッサージを体験する子ども

たち10事業者で構成する実行委の主催で、市も協力する。

会場には防寒具、災害用カードなどの防災グッズの使い方を体験できるブースが並び、看護師が心臓マッサージを指導した。消火器の使い方を体験した北斗浜分小5年生の八木虎昌君(11)

は「いざという時に人助けできるようになりたい」と声をそろえた。

聴覚障害者の筆談を補助する要約筆記サークル「あさがお」も参加。来場した北斗ろう協会の扇谷吉久会長は「聴覚障害者は災害情報から取り残されがちだが、手話がわからない人も筆談などの手段を使って情報を伝えてもらいたい」と話していた。

次回イベントは9月1日に合わせての「防災の日」に合わせて実施する予定で、実行委は「子どもたちの体験の機会にしたい」としている。（神部 造）

道防災士会幹事・伊藤さん 自分の身を守るのは自分

「防災、減災を進めるには避難者側の行動が重要」と話す防災士の伊藤友彦さん（小葉松陸撮影）

避難行動に関するアンケートを企画した道防災士会幹事で、上磯高（北斗）教諭の伊藤友彦さん(49)に、調査の狙いや結果の受け止めを聞いた。

（聞き手・中橋邦仁）

災害時は床下浸水の戸数や農業被害といったデータは公表されますが、「住民の備えができていたか」という検証は道内ではほとんどありません。大雨は短時間でどれだけ降るか、いつやむか予測がつきにくく、避難の遅れにつながる可能性が高い災害です。昨年8月に道南地方を襲った大雨も、もっと大きな被害につながったかもしれないということを記憶にとどめておきたいと思ったのが、今回の調査のきっかけです。

どういう状況になれば避難するかという質問では「緊急安全確保の発令」という回答が突出して多くありました。「緊急安全確保」は、市町村が出す最高レベルの警戒情報で、命の危険が迫り、すでに安全な避難できない状況を迎えています。本来はこのレベルに達する前に避難が必要なのです。そういう知識が正しく把握されていないことが、最も気になった点です。

道南に大きな河川がないことも、危機感の低さにつながっているのではないでしょうか。1981年（昭和56年）の「56水害」での大野川（北斗市）などは去に何度もあります。

アンケートの記述欄に「函館市が避難指示を出すのが遅すぎる」という指摘がありました。ただ今回、避難指示発令が遅れた要因の一つに、そこまで強く雨が降る予報ではなかったという事情もあります。

近年、頻発するゲリラ豪雨のような急激な気象の変化に対し、行政は難しい判断を迫られます。だからこそ、「自分の身は自分で守る」意識の醸成が不可欠です。町内会や自治会が避難所の鍵を自分たちの判断で開けられる仕組みをつくったり、避難所体験会を開いたりできれば、早期避難につながるはずです。

11日には渡島・檜山管内の防災士による「道防災士会道南ブロック」が発足します。身近な防災の専門家として、地域と協働で自助・共助の取り組みを支えていきたいです。